

時空を超えてツナガルマップについて

金津史和¹⁾・奥間建²⁾・麻生伸一³⁾・石垣 忍⁴⁾

Beyond the spacetime TSUNAGARU map

Kazuhumi KANETSU¹⁾, Takeru OKUMA²⁾, Shiniti ASOU³⁾, Shinobu ISHIGAKI⁴⁾

はじめに

近年、インターネット、自動車のナビゲーションシステム及びスマートフォンの普及になどにより地図の利用は、以前よりも増してより身近になってきている。

今回、今年度の企画展「琉球・沖縄の地図展～時空を超えて沖縄がみえる～」を開催するにあたり、そのようなデジタル機器を使った地図の利用ができないか模索したところ、株式会社ユニバーサルデザイン総合研究所、沖縄県立芸術大学等と協力し、琉球王国時代作製された地図から現在にいたる地図を利用したホームページを製作することができた。

本稿では、そのデジタル機器を使いホームページに掲載された新たな地図の利用とそのホームページの地図を利用して授業を実践した沖縄県立コザ高等学校の取り組みを紹介するものとする。

琉球王国時代の古い地図から現代の地図まで

企画展「琉球・沖縄の地図展」～時空を超えて沖縄がみえる～の展示企画の一つとして、時空を超えてツナガルマップを作製した。それは、インターネット上で見るだけでも興味深い古地図や国土地理院の明治以降の旧版地図、そして現代地図とを重ね合わせた。

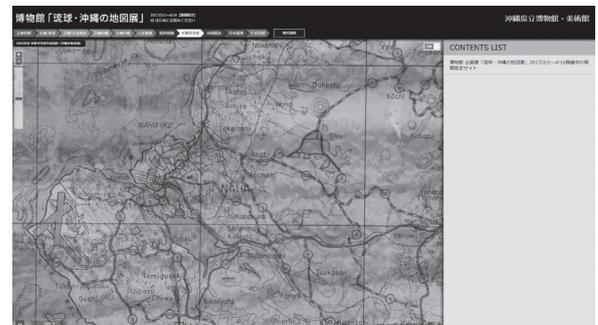
それぞれの地図では測量技術とその精度は時代によって大きく異なるので、正確に重なり合うことはないが、地図展の展示室でパソコンやタブレット・スマートフォン等で、確認することができる。掲載地図は¹⁾「正保年間琉球図」²⁾「首里古地図」³⁾「久茂地村屋敷図」⁴⁾「琉球国之図(薩摩藩調製琉球図)」⁵⁾

「間切図(間切集成図)」「那覇市全図」「米軍作成地図」など11層となっている。

琉球王国時代作製された地図と現代の地図を見比べることができる。とくに、海岸線についてかつては離れ小島であったのが、現在では陸続きとなっていたり、王国時代の道(宿道)と現在の道路との比較などとても興味深いものとなる。



TSUNAGARU-MAP 「沖縄県立博物館・美術館 琉球・沖縄の地図展」のスタート画面



1945(昭和20)年頃米軍司令部作成の地図
コンピュータによるこのサイトの利用はこのアドレスを入力(但し、地図展開期間のみ)
<http://www.tsunagaru-map.com/ryukyu-okinawa/>

¹⁾ 株式会社ユニバーサルデザイン総合研究所

²⁾ 沖縄県立コザ高等学校

³⁾ 沖縄県立芸術大学

⁴⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1 Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan



また、このQRコードで
お手持ちのスマートフォン
から閲覧可能となる。

沖縄県立コザ高等学校 地域学習プログラム

コザ高校では、3年生の選択クラス52名が、13のチームに分かれて、それぞれでテーマを決めて地域のことを調べて、レポートにまとめた。

テーマは「音楽」「エイサー」「スポーツ」「商店街」「遺跡」「沖縄と東京」「学校」等々で、4月から9か月間の授業を行い、その結果、生徒たちはこの授業を通して、この自分たちが生まれ育った地域のことをについて「あまりにも無知であり、再認識する機会になった」、「地元に誇りをもつことができたなど」実感している。

この「TSUNAGARU-MAP」は、生徒の地域学習の授業での成果報告に利用され、その報告会では、生徒たちが地域に出てインタビューや写真撮影など調査等でお世話になった地域の方々に参加するなど交流が行われた。

授業の目的と授業計画について

本授業は沖縄市を中心とした身近な地域を調査し、①地域の新たな魅力を再発見し、発信すること②過去を学び、自分たちの地域に誇りを持てる生徒を育成すること、を授業目標として実施しました。週2回の授業で且つ連続しない時間で行う、という条件で授業に取り組みました。そのため生徒一人ひとりが自分の時間を使って、直接話を聞きに出向き、現地で写真を撮影し取材する、という手法を中心にして取り組みました。特に「直接その場所に行って、話を聞く」ということを何度も指示しました。日々の学校生活の忙しさ、また受験生ということもあり、思うように調査が進まないグループもありました。生徒がここまでまとめることができたのも、地域の皆様が調査を行う生徒に対して、とても熱心且つ丁寧な教えてくれたことに尽きます。ありがとうございました。



授業計画について

全体計画は以下の通りです。

- 4月：プロジェクトの概要説明とテーマ設定
調査の手法と留意点
- 5月～7月：各グループで調査を開始
成果中間報告
- 9月～11月：web作業開始と追加調査
報告書の作成
- 12月～1月：最終発表会と修正 展示会に向けて
地域の方々を訪ね調査を行う

1学期（4月～7月）は、本プロジェクトの意義と調査テーマの設定、調査手法の確認を中心に授業を行いました。全体像を生徒に提示すること、ゴール（最終目標）を設定し提示することはとても大事であることを再認識しました。また、文献資料や写真引用のルールや著作権について、県立芸術大学の麻生伸一先生を招いて授業を行いました。文献の引用については、どの部分までが引用なのか、何ページに記されているか、といった細かい箇所まで明記することの必要性を生徒は理解しました。

2学期にはwebシステムを活用しての作業が中心になりました。ここで生徒は完成のイメージが掴めた様子で、ここから調査はより広く深く、生徒独自

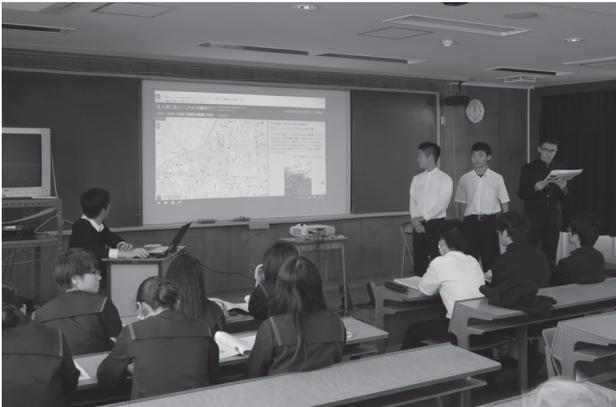


の視点を持ったテーマも増えていきました。また調査したものをどのように編集し掲載するか、という部分にも生徒のアイデアが詰まっています。



コンピュータ上で作業を進める

この取り組みを通して、「自分たちが手に入れた情報を発信する力」が養われたのではないかと考えています。12月の報告会では地域の方々を招いて発表しました。



調査しまとめたことを発表

フィールドワークを中心においた授業では、綿密な計画が求められます。また学んだことを発信する力も求められます。各学校の工夫で時間を確保できれば、とても興味深い地域学習が実践できると思います。また地域の人々や行政機関とつながりを持つため、職場体験等とは違った意味で、生徒の「人間力」を養う機会にもなるのではないのでしょうか。

実際に高校生が作りあげたページ

TSUNAGARU-MAP 「沖縄県立コザ高等学校 地域学習プロジェクト」アドレス

<http://www.tsunagaru-map.com/web/okinawa-city-koza-2016.html>



スマートフォン及びタブレットからはQRコードにて閲覧できる。

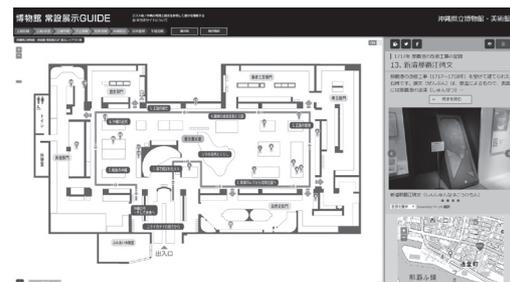
博物館の展示解説に新たなアプローチ

常設展示室の資料を、時代と地理の関係を明らかにして紹介する方法を試みた。

当館には、地域の歴史・文化の豊富な資料が展示されている。通常、その展示資料にはキャプション等の解説のみである。その解説に地理的情報を加えて説明することができたら、さらに当時に近い地図でそれを示すことができたら、より来館者にとって、興味と関心を持ってもらえるのではと考えた。そこで当館の博物館常設展示において、今回の企画展「琉球・沖縄の地図展」で展示された複数の古地図を利用しながら、常設展示室においてもより興味深い展示解説を行った。それが、展示解説システム「ツナガル-ミュージアム」で、展示物と来館者の興味関心をつなげるため、博物館がその中心となり地域の観光資源を結び付け、さらにフィールドワークの拠点として、利用できるようアプローチしてみたのである。

それは、展示資料のキャプションの側にQRコードを表示し、スマートフォンやタブレットでこれを読み取るよって地図表示や展示解説、さらに現在の場所が確認できる写真なども表記した。

また、アドレスを入力することにより自宅からでもコンピュータで閲覧できる。



博物館常設展示室案内図より



TSUNAGARU-MUSEUM 「沖縄県立博物館・美術館 博物館常設展示GUIDE」
<http://www.tsunagaru-museum.com/okinawa-pref/>



このサイトがスマートフォンやタブレットQRコード閲覧できる。



に理解でき、現代の地図と比較するとより興味深く屏風絵も見ることができる。
 TSUNAGARU-MUSEUM 「地図アッチャー/首里那覇港図屏風」 アドレス
<http://www.tsunagaru-museum.com/shurinahakouzubyobu/>



このサイトがスマートフォンやタブレットQRコード閲覧できる。

屏風絵×間切集成図×現代地図 のコラボレーション



⁵⁾「首里那覇港図屏風」は19世紀に描かれた首里那覇港図八曲一隻の沖縄県立博物館・美術館が所蔵する屏風である。美術品として、また当時の地理や交易、交通、都市・集落を知る貴重な手掛かりとして、この屏風絵に、地理的解釈を加えた。屏風絵は俯瞰構図で、俯瞰視点が何方向かあり、またデフォルメや協調が加わる。さらに、屏風絵を地理的に解説する上で重要になるのが、那覇と首里を結んでいた15世紀に造られた長虹堤とその後の那覇の埋め立てによる海岸線の大きな変化である。そこで、間切集成図と現代地図を使って、屏風に描かれた地名・地点を解説した。

なお、地図選択を大正時代の国土地理院地図の旧版地図に切り替えるなどすれば、那覇の変化がさら

今回「琉球。沖縄の地図展」をきっかけに、古地図から、現代の地図と沖縄の歴史および博物館の展示資料とを結び付け、来館者がより興味を持てるよう、このようなWEB上の地図システム製作を試みた。さらに、それが県立コザ高等学校の授業実践のように、授業の教材として多くの学校現場で利用され、地域の歴史に興味関心を持つことを願うしだいである。

最後に、県立コザ高等学校の授業において沖縄市史編纂室や沖縄市博物館、沖縄県立公文書館、那覇市歴史博物館、沖縄市おんがく村、(株)プラザハウス、沖縄市内の各自治会の皆様からご指導いただいた。この場を借りてお礼申し上げます。

註1) P13「琉球・沖縄の地図展図録」参照 正保年間琉球図

薩摩による琉球侵攻(1609年)以降の1645年、薩摩藩から役人が派遣され、琉球全土を測量し製作された。

註2) P393「沖縄大百科事典」沖縄タイムス社参照 首里古地図

首里城下の市街図は、琉球王府の平等所(ふいらじゅ、首里の番所)で使用されていたと考えられている(東恩納寛惇)。原図は、廃藩置県後は旧首里市役所で保管されていたが、沖縄戦時の空襲で焼失した。沖縄県立図書館が所蔵するものは東恩納寛惇が絵師の具志に委託して1910年に複製した

註3) P982「沖縄大百科事典」沖縄タイムス社参照 久茂地村屋敷図

現在的那覇市久茂地(くもじ)地区周辺(=久茂地川の両岸地域)を描いたこの絵地図は、琉球王府の最高機関である評定所(ひょうじょうじょ)が管理していたとされる。図中の書き入れから、この図は、1735年に作成された原図の1741年改訂版とみられる。

註4) P23「琉球・沖縄の地図展図録」参照

伊平屋・伊是名から沖縄島、慶良間諸島、久米島付近までの範囲が間切ごとに色分けされて描かれている。はっきりとした製作年代は不明ですが、1737～50年にかけて首里王府が行った乾隆検地の成果に基づいて製作された。

P50「博物館ガイド」沖縄県立博物館・美術館 平成19年

琉球を間切ごとに色分けし、河川・道路・集落などの情報が記された絵図、王府が独自で行った乾隆大御支配(検地)の測量結果をもとに、作成されたと思われる。

P120-121「博物館ガイド」沖縄県立博物館・美術館 平成19年

19世紀に描かれた首里那覇港図八曲一隻の屏風。当時のたくさんの場面を一枚の屏風に描いている。停泊中の船は進貢船、水平線の遙か慶良間諸島から那覇港に向かう進貢船、さらに首里城へ向かう薩摩の役人、爬龍船競漕を楽しむ人々など首里城と那覇港の様子が描かれている。